

尾瀬

尾瀬の自然を守る会

第26号

今後の尾瀬の利用に向けて

尾瀬に車道網がはりめぐらされ、山小屋の収容力も増加し、さらにはアルミサッシの窓、コンビールの自動販売機と、着々と第一級の観光地としての整備が進んでいる。このまま行くと、この異常な状態はますますエスカレートして行きそうだ。ここいらで、今後の尾瀬の好ましい利用の仕方を呈示し、今後の我々会員自身の山行の規範ともしてゆきたい。

一、尾瀬利用の現状

尾瀬を訪れる人の数は、年間五十万人とも八十万人とも言われている。が、その実数はどこもつかんではない。

本会誌前号に、本会会員の手で行った入山調査結果を載せたが、これも、ミズバショウシーズンのたった一日のデータにすぎず、年間を通じてのものではない。

データもなく安易な論評を加えるのは決して好ましいことではないが、多くの人が認めるであろう一般的な傾向としては、

①入山者数の上から、6月上旬のミズバショウシーズン、7月下旬のニッコウキスゲシーズンにおけるオーバーユース

②団体入山の増加

③尾瀬地区内の宿泊者数の減少

があげられるであろう。入山者数が確定できない理由の一

つは前掲②、③の、貸切りバスでやってきて、尾瀬地区内に泊らず、日帰りが多いといふことである。

古い時代の尾瀬の利用形態としては、ふもとの部落まで日かかってたどりつき、次

三、最近の傾向をふまえ他の地域との比較

の一日を使って中にたどりつく、従って、相当のペテンとか、尾瀬に深い興味をもつ人だけが、ごく少数の人が訪れたままに秘境での探索であった。しかし、昭和三十年以降の開発は、尾瀬利用の形態、いや形態だけでなくその目的も変え、観光地めぐりになってしまった観がある。

二、尾瀬のもつ利用価値

尾瀬には本州有数の高層湿

尾瀬ヶ原、高山植物の宝庫至仏山、等々と微妙なバランス

の上に成り立つすばらしい自

然がある。すばらしいが故に多くの人にそれを知らせたい。

一方、微妙であるから極力人の影響は避けたい。

二つの相矛盾のものを両立させることの観点に立った利用方法の確立が、今後の尾瀬の利用の仕方、ということであり、すばらしく・貴重である。

その際、尾瀬という立地をふまえ、忘れてはならないことは、周囲を尾根で囲まれた、完全なる閉鎖生態系である、

ということである。

三、尾瀬の特質を加味した、今後の尾瀬の利用価値と方法の発見

日本の現状がそうであるが故に、尾瀬の利用形態はなかなか尾瀬を見てくると、尾瀬の現状はなるべくしてなったもの、となってくる。

今夏、北アルプスの標高二千五百㍍の森林限界を越えた所に立つ山小屋にシャワーリ室が完成した、とテレビのニュースで伝えていた。また別の小屋では展望ブロアリ、とあった。さらには、収容力日本一を誇るという山小屋では、一泊二万八千円の部屋にフルコース料理がつくという。ある種の要素がそろっているところとは、教育の場としての使用に向いていくということでもある。今後の望ましい方向としては、

①現在尾瀬の大半は私有地であるが、これらの国有地化

②ふもとに教育施設(博物館等)をつくる、である。

ということのあり方を、以前とはちがった形でとらえ、それがあたりまえ、というようになってきていくようである。

日本で一、二を争うべきしさをもつ北アルプスでさえこうある。

それから較べれば、ハイキングコース程度のきびしさしかない尾瀬を見てくると、尾瀬の現状はなるべくしてなったもの、となってくる。

四、尾瀬の現状はなるべくしてなったもの、となってくる。

日本で一、二を争うべきしさをもつ北アルプスでさえこうある。

日本で一、二を争うべきしさをもつ北アルプスでさえこうある。

日本で一、二を争うべきしさをもつ北アルプスでさえこうある。

第一回尾瀬自然教室

八月四～七日にわたって戸倉の玉城屋に宿泊し、尾瀬の外側からの利用を試みる自然教室が行なわれた。第一回でもありPRの不足等などもあって当初の予定人員を大幅に下回り、参加生徒は十五名であった。

四日正午沼田駅前に集合し関越交通のバスに乗る。河内先生の解説で沼田市の歴史・産業の変遷や河岸段丘の成因などを伺いながら玉城屋に着く。部屋割りを済ませた後に各自昼食をとり一服してからミーティングとなる。スライドによる尾瀬の説明、生活上の諸注意などは指導員研修の時より更に丁寧であった。

五日は鳩待峠から入り、原リーダーの意図との間に相当の隔たりがある事が分ってきた。

一 戸倉宿泊

「尾瀬を汚さず、尾瀬の自然観察を」と言うことで外に宿を選んだが、設備がとついて何不自由なく生活出



来る（毎日風呂に入り、同じ部屋に三泊するので自分の荷物も整頓不要など）、子供たちであるがゆえに、やはり重い荷を背負って歩き、自然の中ではあまりせいたくをさせないことを体験させた方がよかったですではないだろうか。

二 小中高生の募集

学年の違いによる興味・体力の差は想像した以上であった。キャンプか（一般の）山小屋で自炊する計画の時などは面白いと思うが、登山・学習を主体とする尾瀬自然教室の趣旨からみると中学上級以上にしほった方がよいと思う。

三 指導員講座とは違う

数年間養成講座で接して來た人達と、今回の生徒達を比べて見て目立った点は、尾瀬小至仏・至仏を経て鳩待へ戻るコースを採用してみたが、今回の教室で参加生徒の意識とリーダーの意図との間に相当の隔たりがある事が分ってきた。

- 1. 戸倉宿泊
- 2. 丈堀地区泊至仏登山
- 3. 戸倉 泊自然遊歩道
- 4. 帰宅
（松村幸雄）

に親しみ知識を持つていてよく知ろうとする意欲のある受講者と、教えた事を受身で暗記すればOKと言う感じの生徒との差であった。確かに植物名の羅列だけではいけないし、湿原の成因を聞かれた時本の受け売りの答をすぐ聞かせるのが能ではない。

実施要領は左記の通り。
57年度尾瀬自然保護指導員養成講座現地研修会が、去る8月14日～17日にかけて行なわれた。

第五回尾瀬自然保護指導員養成講座現地研修会報告

は個性を持ち、多様な自然によく適合している。しかし尾瀬という一地域でありながらその自然はあまりにも大きく、内在する問題も多岐に亘り複雑化し、四日間の行程ではその断片を見たにすぎない。しかし現状の認識がなければ発展がなく、発展がなければ底の浅い、偏狭なものになってしまう。

後半、重点的に行なった解説実習については後日のレポート中に、表現の難しさ、又保護活動との関連を指摘される方があったが、池塘に播らぐオゼコウホネは、尾瀬の地史と自然の包容力の産物であり尾瀬そのものも、より大きな自然の一部を構成し、生物としての人間もまた、その一人である——であれば自然保護はより一般的、日常的なもので、一員としての目を持つ事により、非凡な尾瀬の自然も身近なものとして感ずるので、出る事のないだろうか。

又、それらを踏まえた解説であれば、入山者それぞれの生活の場でも生きづき、やがては尾瀬の保護にも還元される

- 14日 沼田→三平峠→尾瀬沼
- 15日 尾瀬沼→見晴十字路→竜宮→山の鼻
- 16日 山の鼻→尾瀬ヶ原にて
指導研修→鳩待峠→戸倉
- 17日 戸倉にて高崎女子高校

教諭菊地慶四郎氏によると、湿原の生理生態及びその保護と回復についての室内講習。
後、修了証受与、閉会式。

以上本年度の自然教室の中から拾った反省事項を列挙して見たが、これを基に58年度以降教室を継続する場合の私案をあげてみたい。

一、人員 30名（中三以上）
1. 山鼻地区泊見本園
2. 戸倉 泊自然遊歩道
3. 戸倉 泊沼自然歩道
4. 帰宅
（松村幸雄）

今講座においては、現状把握と指導実習に重点を置き、尾瀬における一般的及び特異な生態、自然破壊の現状とその回復状況、解説についての手段とその方法、会活動の現況等を四日間それぞれのボイントで織り混せながら進行した。受講生の年齢、生活環境も多彩で、それぞれの持つ自然観及び知識も同様に様々である。自然を愛すると言う一つの共通した意識にもその表われ方

昭和57年10月10日

ものと考える。

本講座はあらゆる意味で入門であり、各自がより広範な自然と接触し、自然に対する知識を深め、人間生活との関わりを再認識して行く行為が今後尾瀬内外での活動を実りあるものにする事が出来ると思う。

悪天候下の四日間、講師の不勉強もあり、充分な成果に懸念もあつたが、受講者の熱意は行動中にも、又レポートにも強く感じられ、有意義な現地研修であつた。

移入植物調查案

群馬の宮前氏は一九七三年の「尾瀬」(みやま文庫)で「元ある一定地域内に生育分布していくなかたが、後からその地域に侵入して繁殖はじめた植物と元々その地域に生育分布していたが、その量はわずかであって、後に環境の変化などにより急激にその量が増加し、分布範囲が拡がったり、移動した植物」として移入植物と言ふ語を定義している。そして「尾瀬地方の高等植物フローラ」(一九五四)と比較して

34種類の移入植物をあげている。群馬の須藤・片野氏は（尾瀬の自然保護5）山の鼻地区を中心に群馬県内の調査を行ない、20科38種の植物の分布・量を報告している。

研究部ではこれらの中から5つの植物を選び、その分布・量の変化を記録することにしました。会員は必ずしも分類の専門的知識を備えているとは限らないので、見分けの簡単なもので以前の記録であり豊富でないもの、即ち近

赤田宗昭	野号史	浅見雅史	狩谷上
保	北村聰	佐久間和夫	
須田恵子			
木正明	閑口保	反町稔	
浜田昇	鈴木善三	鈴	
英一	早瀬文子	堀田	
坂井崇浩	三木剛	矢根保	
戸倉室内講師	町田恵子		
菊地慶四郎	岸好人		
塙忠志	河内輝明		
久夫	梅山	太	
養成講座も昭和五三年以来			
五回を数えている。しかし五			

研究部
松村幸雄

審議会を前にして、『要望書を提出し、「林道建設による周辺地域への影響、林業の諸事情を考慮し、悔いを将来へ残すことなく、さらに会計検査院が林道の利用状況調査の結果林野庁に對して処置要求を行ったことにみられるように莫大な国費を使って施工される以上、建設の効果に対する疑問には明解な説明が必要であり、慎重に審議してほしい』と適切な措置を行なうよう要望した。

六月に農水省から事業認可のおりた奥鬼怒スープ林道建設計画について、高崎自然に親しむ会。利根年分布の広がってきた可能性の強いものを選びました。

**奥鬼怒スリバ
林道建設て**



入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は日本における自然保護運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保護を考え、学び、行動する“市民の会”であります。昭和四十六年八月尾瀬を通る国際観光ルート沼田一田島線建設反対運動の際に発足し、その後幾多の困難を経ながら会員の努力によって、運動は続けられています。

尾瀬を愛する皆さん、小さな力でも合せれば、一粒の雨滴が大河になるようになります。どうぞ、この運動にご参加下さい。そして、日本の自然を守り、いつまでも心豊かな人間生活を送ろうではありませんか。

会の活動。会報「尾瀬」の発行。○自然観察会。○自然保护員養成講座。その他、自然保護に関する調査研究、講演会など。

入会の方法。年会費(一月一十一月)二千円。○〇〇円を会の会計へ振替でお納め下さい。会の主旨に賛同する方はどなたでも入会できます。

会の会計 岩260千葉市作草部八六四一五〇三三(松田方)替・東京 6-138023

群馬県国体山岳

競支口々見也

調査結果について

調査は、山岳競技コースの尾瀬、武尊山東笠ヶ岳コースであり、オヤマ沢田代から小笠、笠ヶ岳、片藤沼、ホタル池までの間で、この地域については昨年の学術調査で最終的にコースが決らず現地調査を行なつて決定するとしたところである。

前を子供たちが実際に軽快に降りてゆく。大きな転石の間をまるでスキップのよう足どりだ。転石が動いた。危ない。しかし何とか切り抜けた。追いついて注意してやろう。

ところがどうだ、同じ転石で私自身が転ぶとは。したたかに打った足がすこぶる痛い。動くか？ 幸いに折れてはいないようだ。目撃者は？ シメしめいないようだ。と思いまいや、岩の上のこいつは何者だ。

何と手を伸ばせば届きそうな所で、鳥が一羽こちらを見ている。イワヒバリだ。この物見高い顔つきは、確かに先程山頂で出会った奴だ。他の登山家に餌をねだつていた奴にまちがいない。腹も満ちたので、何か面白いことでもないかと、ここら

をしてみせたものだから、それ、とばかりに飛んできたんだろう。「見ろ。私に恵んでくれない登山者はこうなるんだ」とでも言いに。

<u>入会申込書</u>	<u>年月日</u>	<u>No.</u>
1年分会費 2,000円を添えて申込みます。		
名前(ふりがな)	男 女	
現住所		
〒()		
M	自宅電話()	
T		
S	年 月 日生	
勤務先	電話()	

尾瀬の自然を守る会会報 第二十六号 発行日 昭和五十七年十月 発行者 岸 好人 編集者 河内輝明 事務局 〒156 東京都世田谷区 桜三一三三一一 東京農大第一高等学 校生物教室内



